

世界紀行文学全集

20

山岳編Ⅰ

世界紀行文学全集

20

山岳編Ⅰ

|| 志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるぷ出版

世界紀行文学全集 第二十卷

山岳編 I

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社ほるぷ出版

東京都新宿区新宿二一九十三

電話(〇三)三五四・七〇三一(代)

代表 中森蔭人

総発売元

株式会社ほるぷ

東京都新宿区新宿二一九十三

電話(〇三)三五六・六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

志賀 重昂
加賀正太郎
辻村 伊助
関口 泰
鹿子木員信
楨 有恒
林 久男
別宮 貞俊
小島 烏水
三田 幸夫
藤木 九三
長谷川伝次郎
浦松佐美太郎

英吉利の熊野……………	三
欧州アルプス越え……………	五
ハイランド……………	一五
新高登山の記憶……………	四
ヒマラヤ……………	四七
ヒマラヤ行……………	四七
登高記……………	八
ブロッケン山嶺の吹雪……………	一三
英国の山旅……………	一六
氷河の谷から万年雪の山へ……………	一五
シエラ・ネヴァダと飛驒山脈の比較……………	一五
火と氷のシャスタ山……………	一六
ベエカア山の氷河登攀……………	一六
マウント・アルバータ遠征記……………	一七
MONT BLANC……………	一〇〇
雪と岩……………	一〇〇
MATTERHORN……………	一〇三
ヒマラヤの旅……………	一〇三
ドロミテの山旅……………	一〇三
「氷の海」と CHAMONIX……………	一〇四
ドフィネの山旅……………	一〇七
アルプスの山小屋……………	一〇七
フッド登山……………	一〇九
ベエカア山の氷河手帖……………	一〇九
シエラ・ネヴァダと飛驒山脈の比較……………	一〇九
火と氷のシャスタ山……………	一一〇
ベエカア山の氷河登攀……………	一一〇
マウント・アルバータ遠征記……………	一一一
MONT BLANC……………	一一一
雪と岩……………	一一二
MATTERHORN……………	一一二
ヒマラヤの旅……………	一一三
ドロミテの山旅……………	一一三

松方 三郎

ドーフィネ日記……………三三

山村 一ツ……………三三

冬山断片……………三三

新高南山の南玉山の登攀……………三三

白頭山行……………三三

嶗山行……………三三

スノウドンの思い出……………三三

執筆者・出典一覧……………三三

アルプスところへ……………三三

モンテ・モロ越え……………三三

或る山小屋……………三三

新高東山の登攀……………三三

満州山脈……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

……………三三

山

岳

編

I

英吉利の熊野 (コーンウォール)

志賀 重昂

コーンウォールは、英吉利南隅の一半島である、岩石峭立、暖流之れを洗い、南風之れに激し、岩と浪との壯觀を以て知られ、而かも氣候暖和、コーンウォール全州に一戲場なしと称えられ、偶々都会より旅役者来れば、野天に幕を張りて演戲すること日本中世の芝居を想い起さしむる。加うるにフェニキア、羅馬等、二千年來の旧跡尚お残り、苔蒸す十字形石碑(人類学上最も有名なる)、兵どもが夢の跡(クローンメルの乱、最後まで王党となりて苦節を持したるは独り此州のみ)、宛如たる英吉利の熊野(紀伊)、何の景か何の物か遂に詩料たらざるものやある、唯だ地の辺陲にあるを以て、日本人の来り遊びたる者多からず、我今茲に夏草の露を払いて行かん哉。

ハロー、其の鰥を一定譲らないか、イエッス、サーと、大なる鰥一足を得た。行くこと五町、Caerhilian Hotel と掲板せる宿屋がある、

ケルチック語だ、古色蒼然たりだ、内に入つた、此鰥をフライにして呉れまいか、イエッス、サー、馬鈴薯も新芋が出ました、蚕豆も新豆が出ました、如何ですか、至極妙だ、宜しい様に調理して呉れ、ア、予を此処まで載せて来た汽船の船長も来会した、時に船長、色々御世話になりました、貴君の御蔭でマネークル岩(米國行汽船モヘーガン、同バリー、濠洲行汽船スエヴィック等の難破、乗組員の溺死ありて、古來英國海上の大難所として知らる)も無難に通過つた、幸いに鰥のフライを注文したから、エール酒を一杯飲んで行かないか、それは何より有難い、御相伴致しますと、老船長ベニーと共にホテルに午餐した。此のベニーの亡き母は生前熱心なる宗教信者として四近に知れ渡り、其の故郷トルロの教会に椅子二千五百脚を寄附せし奇特なる婦人である。午餐の後、隣家なる郵便局に往つた、藁葺である茅屋の郵便局、言われぬ程優しい、白河築翁公が見られたならば、其の道中記に何んと記さるゝであらうかと、内に入り、此処の絵端書一枚を東京なる徳川頼倫侯に送つた。

アーヴィングは、英國の古き習俗に花を知人の墓辺に植うることを愛で、特に未婚の小娘の塚に朋輩の小娘共が白き薔薇の花を植うるこそ、此上なき情なるに、かゝる優しき習俗は漸く廃り、眞の辺陲に入らざれば殆んど見るべからずと其のスケッチ、ブックに記してある、アーヴィングの頃すら然りとすれば、今日となり

ては遂に見るべからじと憂ち居たるに、此辺より西へ往けば、墓の畔には芥子、延命菊、雛菊、山梗菜、フヂア、エスコロアなど、紅も黄も紫も狼籍とし、実にも白き薔薇の花は閑に塚を守りて居る、ア、絶代の容華今何処にか在る、特に此の薔薇に対して腸の断つこと幾寸ぞへ明治四十三年七月十二日午後四時、英國の最南端リザード・ヘッド(蜥蜴ヶ頭)に於て。

奥熊野の一漁村否コーンウォール南隅のマラザイオンにて日は暮れた、ツト一宿屋に入つた、背の最も高き一人の男が挨拶に来た、貴君は此宿の主人か、シテ長は何程あるか、イエッサー、エンド六呎四吋あると、即ち地方に関する種々の話をなし、且つ愛蘭は同じ英吉利の内なれども、別の島なりとて、之れを説明せん為め、其の幼童の学校用明細図「Clear School Atlas」まで携え来て指点了、ナント今夜は月を大島の古廟(聖マイケル島)に賞で、明日は潮を潮岬(ランツ・エンド)に觀、明後日は夏木立に瀨八町(ファル川)を下らんとする熊野通に向い、人もあろうに、対岸の四國は同じ日本の内なれども別の島なりとて、之れを説明せん為め奥熊野一漁村の小学校にて使用する地図まで携え来り、曉々數指點すとは、程こそあれと、心なき人こそ笑うならめ、敢て然らず、是れ内には自尊の精神充ち満ちながら、而かも人に対しては我が及ぶ限り尽くさんものと、親切に情籠り居れる処、ジョン・ブルの眞面目躍如として表わるゝを見るのである。

小舟を賃うて、聖マイケル島に登った、漁夫の妻、小兒などが月明に打集うて居る、予は島の人口を問うた、曰く七十六人と、水鳥が光の下に餌を漁うて居る、何んだと問うた、曰くシー・ガル（鵜）なりと、然らばルの字さへ省けば予の姓名となるのだ、左様か日本人が此島に來りたる記念として能くシーガを記憶すべしと云った、やがて花崗石の清渚を歩むこと一時間許にして島を去った。

翌朝ラスベリー、フォル、ペンス、ワシントン、クオート（木苺々々、六合で十六錢）と、節可笑しく外を呼び歩く声で目を覚めた。窓を推すと、聖マイケル島の古城は朝日で燃えて居る、捨て難い風情だ、復た小舟を賃うて島に登ると、昨夜の小兒達はミスター・シーガル、否、ミスター・シーガと口々に呼んだ。古城に登った、高サ二百五十呎、九百年前の創立に係り、城の現所有者聖オーピン男爵夫人には、日本より遠來の客なりと聞き、城内一切を案内すべき様特に命ぜられたりと、案内者は内外残る暇なく予を連れて行った、姓名簿に自署せよとのことである、即ち「地如仙境春長在、愛爾英蘭尽処村」の十四字と姓名とを記して去った。

それより十三哩、ランツ・エンドに出でた、即ち文字の通り「陸上の限界」である、花崗石森然として峭立し、大西洋上万頃の怒浪は両側より疾く撃ち來り撃ち去り、下には隧道の如き洞門を鑿ちて、中間に頸の如き小陸土を余し、洞門の上に一平石がある、是れぞ即ちウエルス

レーが其上に立ちて彼の

“Lo, on a narrow neck of land,

Twixt two unbounded seas I stand”

の長歌を賦せし処、此歌人口に膾炙して不朽の作となつた、ア、我今來りて衣を此の石上に振い、万里の海天に長嘯して、且つウエルスレーの句を朗吟せんとす、聴け蛟竜、聴け海若、而して王侯將相の生命短かくして、詩人の生命遂に千秋なるを悟れかし（七月十三日午後五時、最初及び最後の家）に於て、家は一寡婦が其の幼兒と共に孤貞を守る処、両端書の戸口に立てる者は即ち此の寡婦なり。

奥熊野内陸の小都會否コーンウォール内陸の小都會トルローにて夜となつた、ホテルに入つた、明き部屋が無い故に客間に寢台を俄か作りして呉れ、最と清らかなるシートの上に夢穩かに眠つた。

翌朝トルローの誇りと称うる大寺院に入るに、男女の小兒が百人許り祈祷して居る、是は今日夏季修学旅行に出発前、上帝に祈祷して居るのである。やがて小兒共は四輦の大なる馬車に分乗し、九哩先の海岸に馳せ行つた、ア、此等の信仰心深き小兒よりランダーの如き天を畏れて危険を畏れざる豪傑漢を養成したのである。予は今に於て白狀す、二十余年前、阿弗利加探検の事蹟を食説し、中にランダーが年齒二十八九、阿弗利加の内陸に入り、ニジェール河の水源近くにて蠻人の爲めに襲われ、重傷を負いながら動作自若、依て以て難を逃れ得、帰途

フェルナード・ボ島に斃れたる悲壯淋漓の言行に至り、感奮措く能わず、爾來ランダーの大崇拜者となり居たるに、因縁浅からず、昨夕其の誕生地に來り、予の宿泊せしホテルこそ其の出産の家に程近しと聞き、今しも海岸に向える修学旅行の小供共が馬車を目送しつゝ限り無きの感慨を催おし、やがてファル川行の汽船に移った。

ファル川を夏木立の間に下る、白鷺は木の下蔭に立つて居る、魚を窺うて居るのである、魚は何ぞ、鮎、パイク（鮠の類）にあらざんばパーチ（川鱸）である。右岸のトレゴスナンに一古邸が見ゆる、ファルマス卿の居館である、卿は此処に生れたる海軍大将ボスカウエンの後裔にして、元來コーンウォールは半島で、海に囲まれ居り、旧開地方として人口多く、而かも耕地に乏しければ、古來海軍々人、航海家、水手を輩出し、ボスカウエン大将も亦た其の一人として且つ最も著われたる者である（ドレーク、ネルスン、東郷の三英雄を除きては英人の最も知る海軍大将）。それより川幅は漸く広まり、艦でペンデンニスの古城近くにて海に入るのである。ファルマスに帰るや、ペンデンニス城駐屯の要塞砲兵長官バート中佐より郵書が著いて居る、曰く貴下がペンデンニス城を參觀せられんとする希望に対し、小官は在プリマス要塞司令官に、伺書を出したるに、將軍には差支なしと指令せられたるを以て、此旨早速申し上げ、尚お小官は毎日午前中に在城するを以て、右時刻中

なれば、自身にて御案内申すと書き添てあった。是はペンデンニス城がクロンメルに抵抗せし最後の塁壁なるを以て、予は見たく思い、城の長官バート中佐に申出でたるに、要塞の事なれば、同中佐は在プリマスの司令官に同書を出して予の希望を容られたのである。依てペンデンニス城には明日か明後日に参観に行くべく、さすれば予は御蔭にてペンデンニス城を参観せし唯一の日本人となるのである。

ファルマスの街にて老船長ベニーに会った、ヤー貴下を御迎へに行く途中である、実は老妻が貴下のために純粋のコーンウォール料理を調えた故、今夕は緩りとせられたし云々と、英人は如何にも真心深き人種である、如何にも優雅な人種である、殊に予はコーンウォール人とコーンウォールの風土とを最も賞ずるのである。

(明治四十三年)

欧州アルプス越え

加賀 正太郎

道程

北欧スカンデナヴィアの旅程大に進んで諸威西岸の一港ツロンジエムを発したる同船の客に一人の僧侶が在た、眼なれぬ若い者の一人旅を憫れんでか頻りと僕に話かける、彼は僅に英語を解し僕は殆ど独逸語を知らぬ、肩のはる事夥しい、会話を続ける中に彼は頻りにラップランド旅行の快を説いて止まぬ、やがて僕が瑞西に遊ぶ意あるを知っては道程日程を説く事愈々精しい、つらくおもん見るに地図の書き振、地名の記憶、彼は到底唯の鼠ではない、年は五十の上を二つ三つも越えたらうか半白の老翁、詰襟無地の旅行服に眼だたぬ外套一着に及んで難囊肩に丈に余る竹を杖づいてラインディアーの角細工を無難作にぶら下げた有様、舶来の仙人は斯うもあらうかと僕は大に之を尊敬する、其一眼を閉じて諄々と説き出す慈顔は到底忘れ難い、老人の親切によって船がベルゲンに着する

前に僕の瑞西旅行のプランは都合よく出来上った、蓋しベデカアの精しきを以てしても登山旅行には殆ど用をなさざるを思わなければならぬ(尤も他に適当な登山案内記はあらうが僕は忙しいので遂に見当らなかつた)東京を発する時から登山の意はあったものの、生来の臆病歐羅巴は始めての一人旅に何う在うかと気まよつた僕をして登山の決意あらしめたる此好老翁に茲に謹んで感謝の意を表する、僧侶名は *Willeh. Im Klose* 独逸ハノオヴァの片辺りキリンゲンの人。

用意

伯林より発したる僕は道順といふ且つ又山崎先生の御教示もあつたので登山の用意はビールの名産地ミューンヘンであらまし整えた、これが抑も第一の失策であつた山崎先生はチロルに遊ばれたのであるからミューンヘンからは頗る近い。処で僕の第一の登山計画はユングフラウである、気のきかぬ僕はそんな事は更におかまひなしに大に気のきいたつもりで今迄の服に一切の行李を合して税関の面倒のない同じ独逸領のフランクフルト、アム、マインツに送り付けた、それで此処からは此町 *Fris Schatz* の店で整えたロオデンの服、ロオデンの外套、ロオデンの帽子、釘だらけの靴にパッチーに足をかためてリュックサック背負つてアイスピッケル片手に御苦勞様にも帽子にはチロル風俗鳥の羽子迄附けて飛び出した、扱ロオデンづくめの

装束は兎も角もさながら甲鉄鎧をつゝかけて歩く思ひの靴をひきづつて汽車馬車を駈って行くインタアラアケンまでの長道中は恐れざるを得ない、至る処ホテルの廊下といわず室とはいわず美しくはりつめたモザイクの床板絨毯を靴の釘に掛けて縦横にひっかきちらしてウエエタアの眼を敬てさしてやったのは聊か痛快でないでもなかったが磨き上げた大理石の広場には毎度足をとられて殆ど閉口した、多少の足ならしも

必要には相違ないがさりとてはあまりに早過ぎた、チロルならば兎も角も瑞西に直行するならば先ずツウリッヒ辺で整える事が最便利であろう、品物も此処の方が寧ろよく整っている様だ、尚アイスピッケル、ロオプ、灯燈等はガイドに借用する事も出来る様だが僕は後の思出にもインタアラアケンで一通り買整えた、グレエシヤガラスは心付けるままにツウリッヒにて飲食料は全部インタアラアケンでそれぞれ用意した。

ミュンヘンより コンスタンツ (チロル)

伯林のけばくしい整い過ぎた町から来て何処となく落着きのあるミュンヘンの薄汚れた町の様を見て僕先ず大に喜んだ道を行くにリュックサックを脊に足拵え厳重な登山客の帽に挟んだ羽根に風を截つて意気揚々と行く者来る者一再にして止らざる殊に心強い。

避暑地に近いミュンヘンは今やハイシイズン

とやらで何処の客舎も満員である、僕はホテルロオトというに辛うじて一室を得た、其晩一浴を試みようと思ふに命じた処が今夜はミュンヘン中のホテルというホテル悉く満員で此処では湯殿まで客を入れたので御用に応じ難いとの事に僕は愈々其繁昌に驚いた、(但し湯殿へ封ぜられたのは僕じやない) 夏此処へ来る人は予め室を約束しとく必要がある。

滞在二日の多くもない時の多くを登山の用意に消して僅に新古ペナコテエを見たばかり惜しき分れをミュンヘンに告げて八月十六日夜八時五十分発す、多忙の間にもビールを味う事だけは忘れなかった、同夜十一時二十分ザルツブルグ着既に奥地利領である直にホテルドユウロオプに入る。

十七日早起、ホテルの稍田舎びたる我意を得ているベデカアの教えるがまゝに近郊の高台ガイスベルグに登る登るといってもてくく歩

く事を要しない電気鉄道で先 *Pasing* 迄行つて此処で登山鉄道に乗換える尻上りの機関車に小形の客車一台縦に似た針葉樹の鬱林を縫うて汽車は囂々と音を立てて這い登る事極めて苦しうである一二八六米突の頂上に達するに四十五分を要せず蓋し小嶺な代物だ頂上は広闊で頗る展望に便利である晴れていればチロル一帯の諸峯一望の中に収め得る形勝の地であるが今日は快晴に過ぎて霞んで見えない僅に南々西に当って *Scybneldespit* のトンガッタ頭を指摘

し得たしかもそれすら暫時にして霞の外に消え去った南から東に亘つて群山疊重してらしい方面は殊にぼんやりしてグロッスグロツカナアの位置や何処と求めたけれども遂に得ず。

遠く南北に亘る山塊二列、其挟む谷は驚くべき平坦にして両側の前山の足と接する処くつきりと鮮なるはフヨルドの波の岩壁を洗うにさも似ている、而して其色は薄緑、一帯の牧場である、緑深く蓋われたる大小の丘陵は見る眼著しく其間にきり／＼と浮んでいるガイスベルグは蓋し其最も大なるものゝ一である、谷は南は狭く北するに従つて広い *Saaseh Fluss* は其中央を緩流す、河を挟む白亜尖塔の一叢はザルツブルグである、対岸にある一小丘裾は緑林に包まれ頂上を蓋うて古城あり、絵では屢々御目にかゝつた事がある僕には近く伯林でグラが演じたタンホイザの背景に記憶に新である。

今日珍らしくガイスベルグの頂近く蟬の声を聞いた。

午後四時四十二分汽車ザルツブルグを発す、同室の客の一人は僕と同様リュックサック肩に足取り重そうである、汽車は谷の底を行く、日暮に近づいて両側の山漸く高きを加う、月は東の空にかゝつてやがて日はとつぷりと暮れた、月明のささぬ山陰、丘の中腹、峰の頂、処きらわす球燈の連なる事頻である、何事と未熟の独逸語振り廻して前に居るマウンテンニアに聞いて見れば、明日は此国の帝ジョセフ何世とやらが第八十回目の御誕辰に当るを村人の祝ぎ申して

かくは騒ぎ奉るなりと解された、囂々たる汽車の響の間に女子供の騒ぎ廻る声さえ聞える、行く程に騒は愈々大きくなって窓近く万燈様のもの押立って笛や太鼓ではやし立てゝ練って行く処は頗る池上の御会式の騒に似ている、十時十五分インスブルック着停車場に近きホテルドユウロオプというに入る。

十八日・早朝からドガンドガンと打出す祝砲か花火か山谷に響き渡って寝たままらず起き上る。麓山両側から蓋いかぶさる様に峙つてゐるインスブルックの町は、町として雪をかぶつた山の見えぬ町はないポルチエ工に教えられて今日も鉄道の御厄介になつて Hurgelberg に登る、谷狭きに過ぎ山頗る高い、其中腹にも及ばぬ此処からは視界あまり広からぬ怨がある、後に続く喬木林の一帶をぬければ直ぐに峨々たる岩山の根に出られそうである、今日は一つ足ならしを試みようとして似た木の密林を赤白のペンキに教えられて爪先上りの石ころ道をとぼ／＼と歩き出し、一日二日とはきなれてみれば登山靴も見かけ程に重くも感じないが唯横に狭く縦に長い西洋人の足に合はして造つた出来合いの甲鉄艦には恐れざるを得ない、こんなものを履いて二日も三日も続けて歩けるものか何うか頗る疑問である直きそこまでと見えた森も中々つきそうにない兎も角も疑問は宿題としてビール一杯に息をついて下山とする。

午後一時発、コンスタンツに向う、今日の相

客は仏蘭西語を話してる中婆さん二人、一人の男の子を連れてゐる、彼等はしきりに角砂糖に珈琲の汁をたらししてしゃぶつた車中頗る暑い汽車は Inn Fluss に沿うて進む、追々と高い山が見えてくる、谷は愈々せまつて雉の足は右左から鉄道線路を侵さんとするものがある、谷遂に極まつて止む事を得ず汽車は正面に連亘する山のどて／＼を貫ぬいて進む Ardenz の隧道である暑さは愈々暑いやがて Lind au に着いた、税関の検査がある、何と聞かれても分つても分からんでもナイン、ナインで押し通して無事通過税関ばかりは独逸語も頗る便利である此処で船を得て一碧万頃のパオデンゼエを行く双輪の汽船はゴトン／＼と音を立てゝ鏡の如き水面をさがす薄暮 Friedrichshafen を通過したがツエツペリンの飛行船は遂に影も形も見せないやがて日は暮れた、満月半天にかかつてデッキの上人稀に爽涼の気面を打って快極まりなし九時半コンスタンツに着いた、バスは Insthotel というに僕を送り込んだ、廊下幾巡りして湖に面する一室を得た窓を開いて見れば湖面は酸漿提灯立て連ねた遊船集する間モオタバオトは馳せ交つてコン／＼チキチンの大騒ぎ馬鹿臭い事甚だしい、一浴して寝る。

ミュンヘン、ザルツブルグ、インスブルックの三市は凡そ正三角の各頂点に位置している、ミュンヘンから瑞西に入るにはザルツブルグへ廻るのは迂路だ少なくとも一日を要する、インスブルックは我が信州の大町に比せらるるチロル

地方登山客の発足点である、然しチロルに深入りせずしてチロルの山を見ようとするものにはザルツブルグのガイスベルグは一顧に値すると僕は信ずる。

それ豪宕の景を以てしてはチロルは遂に本家たる瑞西には及ばんが斧斤を加えられざるアルプ。粗朴なる山地の風物を味わんとするものはチロルに遊べとは僕再三聞く処であつたが独逸語に自信のない僕は臆病風に吹き飛ばされて如斯チロルを通り抜けてしまつた今思えば残念である。

コンスタンツより インターラーケン（リギー）

十九日。思はず朝寝をしてコンスタンツはホテルを見ただけで出発しなければならぬ事になつた。

Neuhaus で途中下車をした次の汽車を待つ間に Rheinfall を見る為である、処でその Rheinfall なるものは実につまらぬものだ僕は始め左岸に出でしぶきをあびて小船で滝の前を横ぎつた事を記憶している、次に滝に対して頗る堅いビイフステキを食べさせられた事を記憶している、最後に先程から此処で一心に釣を垂れていた一人の若者がいとも大きい一尾の鱒を釣り上げた事を記憶している、以上三つの記憶を残して次の汽車を待ち兼ねて此処を去つた Rheinfall 等というものは決してわざ／＼見るに及ばん万一見たい人は汽車の窓から沢山だ。

ツウリツヒに着いた、ツウリツヒゼエを前にしたツウリツヒの町は美しい市街の多い瑞西の中でも最も美しい町の一つだ、夕方 Alpen Quay を巡して Tonhalle で夕餐を認めた、食卓の白布に樹影婆娑たる所妙なる音楽を聴きながらつゝいたラインサモンの味は又格別である、其儘の貴いのは更に一驚を喫した、アルペンクイからは晴れていれば湖をへだてゝ遠くアルプの連嶺を望む事が出来るのである、湖面に突き出た陸のつゞきにガラス蓋いの下に山の見取図を入れて山名標高等を入れてある所等は行きとゞいたものである。

二十日。午後三時十七分ツウリツヒ發、Arth Goldau で電車に乗換えて Rigi に登る頂上は可なり広い南面すれば東から西に亘って連嶺堂々たる雄姿を雪の冠り鮮やかに晴れたる空に印している裾はあるかなきかに覆んで漂渺としている処は到底地上のものとも思えぬ僕にとってこれが瑞西アルプの初見参である。

Rigi Kulm は Jng. Luzern, Lowerz の三湖に囲まれた高台であつて標高五〇八〇・六呎北と西は断崖絶壁をなして目の下に見えるルファーンの湖は日にテラテラと光っている南から東へかけては一体に稍や緩いスロオプで優に四千頭の牛羊を放ち飼う事が出来るそうである緑の丘は幾つかの峰に分れて遠く延びている僕はカツフェエ一杯をすゝつて暮れゆく夕陽をあびて赫然と輝き出したアルプを後にして今度は

ルツファン側に下る汽車は下る日は落ちる Vitznau に下り着いた山の屏風に囲まれたルツファンの湖今夜も霜はないが船中にわれ月を領した。

やがて船は一転してルツファンの町のあかりがちらちら見え出した、それと同時に左右の山のイルミネエションが見える抑も山にイルミネエションを点ずる事からして言語道断である、博覧会の余興なら知らぬ事イルミネエションは断じて山を飾るに用うべき類のものではない、若しそれピラスの頂上にサアチライトを点ずるに至つては沙汰の限り、毛唐人の殺風景もここに至つては極まれりというべしである、折角の興もさめた。

九時四十五分ルツファン着 Hotel St. Gotthalt は満員でこゝわられて Hotel du Cygne Rigi とつうに投じた。

二十一日。有名な Love Denkmal と見る緑濃き池に臨んだ岩壁に彫み込んだ瀕死の獅子像は仏蘭西革命にチュイレリイで死んだ Swiss Guards の記念に作つたものである、直ぐ其隣に Glacier Garden がある一巡見終つて Seebucke の上へ来た橋の下にきれいな小魚が沢山およいでいるそれに見とれてミューンヘンから遠路の所懐々かついで来たアイスピッケルをこころりと取落した、それが又折悪しく欄干の間をすべつて水へ落ちたなり沈んでしまった、悪い辻占だ、よっぽど山登りはやめようかと思

つた。

ルツファンで美しいのはプロメネエドの並木である。

十時三十五分船は音楽と共に発した、船中で計らずも伊太利大使館の越田氏と代議士板倉中氏とに落ち合った、瑞西に数ある湖水の中でも特に水の色の秀でているというルツファンの湖、日はかん／＼と照つてロオデンの服では少し暑い板倉代議士は竜動、巴里、伯林、維納の下水を論じ我が東京市に及ぶという大議論を滔滔と弁じられる、湖の兩岸は次第に覺つて行手には橋がある、何うなる事かと見ていれば橋はサット両方で開いて船は之をかすめて行く、兩岸は愈々せまい、汀に衣洗う女が居る、船の起す波はあやうく彼女の足を洗わうとした、女は驚いて飛びのいた。下水論のつきぬうちにやがて船は Alpnachstadt に着いた、此処から Brienz までは汽車でそれから又船である、六時前に Interlaken まへ漕ぎつけた、Grand Hotel Jungfrau というに入る、室がきまると直ぐに三人連で Jungfrau 観山に出かけた。インタアラアケンには二つの展望台がある、Ringerkerg と Hrlimwechliub これである前者は比較的高いがユングフラウへは遠い後者は稍低いが山へは近い、双方共電車がある、僕は山に近い方をとつた。

Jungfrau とは誰がつけたか名には似もやらぬ豪宕な姿である、此処からはラウタアブルンネンの谷を通して両方の緑の山の間に僅に其雄

姿を仰ぎ見るのである、今日は雲の影さえなく頂上までよく見える、頂上に近く右によったシルバホオンは元より真白であるが此方方面からは絶壁をなしているに係わらず雪が可なり多い、双眼鏡で見つめていられた板倉老人は僕が明日あれへ登るんだといったら大に心配されて万々思い止るべき旨を諭される、ホテルへ帰ってから懇々僕の室まで来て懇々と説かれる、僕は決して無謀な事はしないあぶなそうならば直ぐにも引きかへすつもりであるといつて漸く御許が出た、僕は謹んで御親切を謝す無事に東京へ帰ったら御馳走を下さる御約束だ。

夜に入つて俄の大雷雨に明日の登山は到底だめとあきらめて腰をすえて玉を突く両君を散々ためてやった。

ガイ ド

廿二日。昨日インタアラアケンへ着くと直ぐにホテルのポオチエにガイドの推薦を頼んだ、処がそんなものは此所にはあるとかないか頗る要領を得ぬ返事であったが明日は雨ときまつたのでそのまゝにして前夜はすんだ所で今朝になるとそんなものは断然ないとぬかず、大に怒つてそんな馬鹿な話はないと言つても彼は頑として受附けぬ、こんな馬鹿野郎を相手にした所で仕方がないから今度はクックの店へ行つて頼んでみた所が番頭さんの言うには隣家の *Mr. Grunder* という若紳士は此土地で有名なマウンテンニアであるから此方に相談をされたら

然るべき案内人が得られようとの事に早速と出かけた、グルンダア君というのは表通りの煙草屋さんの主人であつた、今は未だ見えぬが十一時過ぎには必ず此処へ来られると聞いて一たん引さがつて今度は時間を見計らつて再度御訪ねをする今 *Bischoff* から帰つたばかりだというグルンダア君は店に居られた、ガイドの事を御願ひすると心容く引受けて下すつてそれでは自分がこれまで連れて歩いたガイドを御世話しようとの事、店へ頻々と来る御客を殆どそつちのけにして日程の事や其他色々の注意親切に相談に乗つて下さる、地図を出したり写真を出したり追々と御得意の色も表われて大にビイクハンタアを發揮される、結局今日午後二時にガイド自身を此処へ来させるから今一度其時間に来るようにとの事に再会を約して分れた、色々の話の中に昨日の様な大雨の後に登つてもガイドを連れてなれば決して危険はないと聞いて僕は大に気が強くなった。

ホテルの前の大芝原へ突き出た小料理屋で昼餐をすまして立ちかける後からハロオと呼びかけた人はグルンダア君であつた、同君も此所でカツイをめし上つてゐる処である、二三語立話をしてゐる所へ当のガイド *Christian Hiesler* 君もやつて来た打見たる所年の頃五十ばかり諸顔に半白の鬚をもじやもじやとはやした巖文造りの中老人である、中々人なれてはいる様だが見るから田舎人の風があつて如何にも山の案内でもしそうな男だ、加奈太に居た事があると

かで英語も話すばつ／＼貨銀の事や道の事等を相談するグルンダア君間に立つて大に世話をやかれる、結局 *Jungerman* の頂上を極めて此処とは反対の側にある *Fisch* へ下つてそれから *Brigg* 停車場まで送らせる事にしてガイドが九十法ポオタアが七十法ときまつた *Tarif* によれば百法に八十法であるこれもグルンダア君の親切であるそして明日から三日間で終る予定ではあるが暴風雨其他の事故で其上山籠り幾日かゝつてもそれ以上貨銀の割増は要求せぬという約束である、それで愈々話はきまつた今度は午後六時に僕を伴うて飲食料其他必要品の買入りに歩く為へスラアがホテルへ来る事にして三人共に分かれた。

約束の時間通りにへスラアは来た町へ買物に行く買入れた品々はパン、バター、ジャム、チーズ、茶、砂糖、オレンジ、牛肉の罐詰、スウプの種、チョコレト、葡萄酒三本、コニヤック一本、それから蠟燭、煙草、マッチ、マイカの提灯、ロープ、アイスピッケル等である、これだけをつめ込んだリュックサックは可なり重いものになった、これを僕のポオタアになつて行くへスラアの息子に持たして帰して明日の八時を期してへスラアに分れた一人でホテルへ帰る途中店の前を通るとグルンダア君は又飛び出して来て色々と注意してくれる、僕は又へスラアの人物に付てうるさく聞いたのでグルンダア君は遂にこんな事を言い出した、僕は今日迄に随分方々の山へガイドなしで登つた事もあつた

所が最近に或る淑女とエンゲエジが成り立つた、所で彼の女がいうには今日以後妾はあなたお一人では決して山登りを許さないが若しあなたにして老ヘスラアを伴われるならば何処如何なる険山と雖も妾は安心してあなたを手ばなすと言ったそうである、事此処に及んで僕大に安心して厚く札を述べてかたく手を握って分れた。

用意は万事整った、気づかいなのは只天候ばかりである、今日は一日中降ったり、やんだりユングフラウはとうとう終日姿を見せなかった、夕方に雨はあがった、星がちらほら見える様にはなったが明日の天気は未だ至極心もとない。

ベルネスオバーランド

アルプの主なる山系は略二列をなして西々南から東々北に亘って延々と瑞西を貫いている、而して其西の半分は山最も高く Rhone の谷を狭んでは、屏行し千山万嶺重疊してアルプスの中でも最も豪宕な景色を形造っている、其南にあるものは仏蘭西と伊太利との界を走って Mt. Blanc (仏蘭西) Gd. Combin Mt. Collon Matterhorn (Mt. Cervin) Mt. Rosa 等の諸雄峰が其中にある、之に対して Rhone の谷をくだてたる一帯の地が Bernese Oberland である、Jungfrau Group は其最も山域広大にして群山錯峙する処にして其造り出す景はアルプス中有数のものである、而して我がユングフラウは宛然これが盟主ともいふべきである、

(Einsiedlern) の方が高きに於ては極く僅かすぐれてはいるが、僕は先手始めに之を征服するのである。

ユングフラウ

廿三日、早起結束九時十分、ヘスラア父子を従えてインタアラアケン、オスト、バアンホフを發す今にも降り出しそうな空模様頗る心もとない、ラウタアブルンネンで汽車を電車に乘換える、ラウタアブルンネンタルは猶も真直に奥深く入り込んでゐる両側の絶壁は一副毛書きの墨絵の様にぼつと見える、電車は左折して急に断崖をかき登る、今まで底をたどつて来た谷は倏忽にして脚底に見る様になった、左の窓に見えたものが右の窓に移った、やがて電車は Kl. Scheidegg に着いた、ここで又乗換である、時分どきどきであるので Kl. Scheidegg Buße というに入つてタアブルドオーの昼餐を食べる。

ユングフラウは直ぐ目の前にありながら雲厚くたれて僅に Eiger の裾が見えるばかりである、しかも眼の前にせまるグレエシヤの壮観に先ず魂を天外に飛ばす。

一時十五分 Jungfrau Bahn はクライン、シヤイデツヒを發すアイガアグレエシヤの壮観を右に見てそり／＼と行く事程なく隧道にかかった、むやみと岩を穿って登るのである、二時十分前 Eigerwald 駅に着いた、車は依然として隧道の中にあるので唯展望の為に岩を穿

て窓をあけてあるのである、今日は雲霧々たりで更に一物も見得ない風はビュウ／＼とうなりを發して雪を吹きつけている、頗る、冷気を覚えた、再び元の電車に戻つて暗り峠を行く事又二十分ばかりにして Eismeer に着いた。

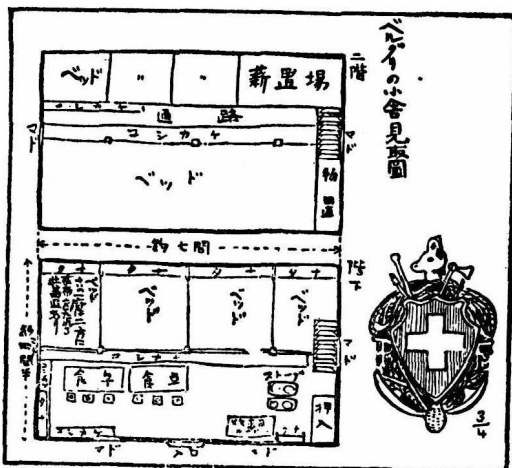
ユングフラウ登山鉄道は世界第一の高い鉄道である、場所の高い事も第一等であらうが其運賃の高い事も第一等であらう、延長三哩半一時間と少しで達する所を十八法取られる、最も全線殆ど大磐石を穿つての隧道で難工事たる事も亦世界第一であらう、それに登山客は夏期二ヶ月ばかりに限られるから運賃の高いのも無理はない。現在の終点たるアイスマアの停車場は猶洞中にある、岩屋の中にしつらえたレストウラントの備さへある、洞の細道をだらだらと下る事一二丁で洞の中に達した、ここで總ての用意を整えロープを用いる、老ヘスラアを先頭に僕を中にして若ヘスラアを殿軍に三人珠数つなぎになった、始めてロープで腰をしぼられた時には僕何共名状すべからざる心細さを感じた、梯子を下る事十余丈、僕等三人はグレエシヤの上に下り立った、雲ひく／＼たれて僅かに数歩の間を見得るばかり、しかも雪あかりで足元は極めて明るい、小糠の様な雪は霏々として面を打つ、此時僕等の後方程遠からぬ所に聳々たる一大響音が聞えた雷かと問えばナイン、アバランシュとはヘスラアの答であつた、洞を發してより十歩ならざるに先ず肚胆を抜かれた大小の雪塊錯然と横わつてを右によけ左にさけて踏み

かためられたる雪の細道を足もとしどろにヘス
 ラアの後を追う、この迎快晴の日の壯観は定め
 て見物であろう、グレエシヤを上つては下る事
 三度ばかり、雪と雪との間に僅に頭を出して
 岩角をかき上る事前後二回、是は又傾斜頗る急
 で殊に今日の雪にぬれて兎角足を失いやすい、
 老ヘスラアは注意周到に傾斜の急な所にかゝれ
 ばロープをあるだけ延して自身先ず出来るだけ
 登って足を踏みしめて僕を引き上げて暮る、ゲ
 レエシヤの裂目所謂クレヴァスを渡る時最も注
 意を要する、極く巾のせまいのはひよいと一ま
 たぎにも越せるがそれでも中をのぞき込めば下
 は大きな洞になっていて底は到底見えようもな
 い、中に数十十余の水柱は銀色燦と輝いて頗る
 薄気味の悪いものである、稍広いのになると老
 ヘスラアは先ず手前の雪の端をしっかりと踏みか
 ためて倒れる様子にのしかゝって向う側の雪角
 に手をついてアイスピッケルの柄深く打ち込ん
 でこれを力にひらりと飛び越える渡りきればロ
 ープを延べて一段高い所に足がかりを造って身
 をかまえロープをしっかりと握って僕が万一の危
 険に備える飛び越した僕は又若ヘスラアの越え
 るのを待たねばならぬ皆が渡りきるま僕は三人
 共に油断はならぬそれがとも飛び越せぬ程の
 ものになると板が渡してあったり或は梯子がか
 けてある、クレバスの数も四つ五つ過ぎて最後
 の岩壁をかき登って四時十分前 Bergli Hütte
 に着いた、先客は既に三人あった皆菓をかぶつ
 て寝ている、僕等が着くとこれも今迄毛布にく

るまつた小屋守の若者は元氣よく跳ね起きて
 甲斐々々しくストオプに点火する、湯が沸いた
 処でヘスラアの用意する、茶にコニヤックの小
 量を混じて試む、快味極りなし、外は未だ雪が
 やまぬ。

クラブハット

ベルグリのクラブハットは雪の間に僅に取残



された岩角に石を積み足して少しばかりの平を
 造った上に建てられてある。木造の二階建て屋
 根は板葺で四囲も稍厚い屋根板様のものではな
 くて、内側は又削り上げた板で隙間な

くはりつめてある、天井も同様床も板ばり出入
 口も窓も二重になっていて殊に窓は中のはガラ
 ス戸で外のは板戸になっていて風の入りようも
 ない三二九メートルの高さにある山小屋とし
 てはこれだけでも実に贅沢を極めたものと言わ
 ねばならぬ、間口が七間に奥行が四間もあるう
 か、内部は長さに添うて半分に仕切つて前の半
 分は食事炊事をする場所、食卓もあれば形の頗
 る面白い腰掛もある炊事用のストープが二基、
 煙突を長くひいてついでに室を暖める様になっ
 て、奥の半分は一段高くなった寝床で軟い
 藁が三尺程の厚さに一面に敷いてある、寝床の
 後の板壁には二段に棚がかけてあって僕等の携
 帶品をのせる事が出来る、入口を入って右の端
 の窓ぎはに梯子段があって二階はベッドと物置
 になっている、屋根の裾は直ぐに床にとどいて
 いるので中央は立つて歩けるが両端は頗る低い
 寝ぞうの悪い人は屋根裏を蹴りそうである両端
 に窓が二つあるきりで下程に明るくない、ベッ
 ドは二階に十一人下で十人寝る事になってはい
 るが一人宛仕切つてあるわけではないのでまだ
 十人位は大丈夫寝られそうである、毛布の用意
 は充分にある、ストープ二基、炊事用具、鍋、
 皿、茶、珈琲の道具一通り不自由はない、ナイ
 フ、フォーク、スプーン、コップ求めに応じて
 貸してくれる、小屋の中でつかける上の半分
 がコオデン様の手厚い毛織物で出来てる上靴が
 ある、それから僕等の飲食料を滞在中一タリユ
 ックサックから取出すのは面倒とあって一時う